

学会ニュース

日本女性学会

第9号 1982年2月

《 第6回研究報告会 報告要旨 》

ニューイングランドにおける女性学

渥 美 育 子

「ボストン地区には力強い女性運動がおきないし、大学の数が多いわりには女性学が貧困だ」と、西海岸に留学していたアメリカ人の研究者が東部にもどってくるなり私に言った。しかし1年の予定でハーヴァード大学ラドクリフ・カレッジに客員研究員として滞在した私には、次から次に催される女性学関係の行事は多彩でとても刺激的であった。81年度前半だけでもめばしい会議や大会として、2月6・7日にニューイングランド地域の女性学会・2月7日にニューイングランドにおける人種差別に関する会議、3月5～8日には全米女性心理学会、4月3～5日には女性と法律に関する全米会議、4月30～5月2日には女性作家に関する国際シンポジウム、5月31日～6月4日にはアメリカ女性学会の全国大会が行われている。各都市の大学レベルでの集会を考慮に入れたら、数えきれないほどだろう。

アメリカ史の出発点であるニューイングランドは、マサチューセッツ、コネティカット、ロードアイランド、ヴァーモント、ニューハンプシャー、メインの6州からなる広大な地域である。その中で得た私の知識はごくわずかなので、私の住んでいたマサチューセッツ州を中心に多少とも関わりをもった大学機関や研究所の現状にしばってお話したい。

女性学の中心地は何といってもユースタス・マサチューセッツ大学ボストン校)——ここでの女性学講座はアン・フロインスをディレクターとする数名の教授によるコースと、各学部の女性関係の授業を統合したものの2本立てで、女性についての新しい知識を大学全体のカリキュラムに反映させ、性差別のないオリエンテーションを推進する典型的な形をとっている。アメリカの学生はメジャー(専門分野)の他にマイナー(準専門課程)として一つの分野を集中的に勉強するわけだが、女性学をマイナーとしてとる時必要なのは7コース、21単位。まず「女性と社会」のような導入コースを1年でとり、2・3年で個人的、社会的要求にみあったテーマを選んで社会科学系列、人文科学系列から各々少なくとも1コース以上とるのがふつうである。面白いのは実習制度で、“職場における性の強制に反対する同盟” “女性のための就職機会を広げる会” “ウィメンズ・センター” “女性のためのカウンセリング” など地域の活動機関に見習生として出かけて行って実地訓練をする。セミナ

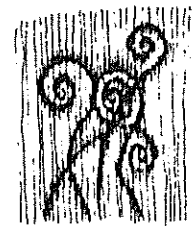
とあわせて6単位。これは学問と女性運動の実践を一致させる、アメリカの女性学の特徴をよく表わしていると言える。日本でも女性学コースをとる学生が“行動を起こす女たちの会”や“フェミニスト・セラピー”に授業の一環として加わって助けてくれたら素晴らしいではないか。その他キャンパスには資料を集めた“女性学リソース・センター”、学生の日常の悩みにこたえる“女性センター”があり、今春はブラックスタディーズと合同で“黒人女性芸術家のフィルム・シリーズ”が上映された。同大学のメディア・センターの2女性は基金を得て〈日本の主婦〉についてのビデオを完成したところである。このように学際的な女性学講座を核として、キャンパスに女性文化が作り出されている。

ハーヴァード大学には女性学コースがない、というところが驚くが、「権威が上るほど、女性学の普及は下る」のだ。ここではちょうど新聞の“婦人欄”のように、女性についての女性による研究のすべては、大学の独立した一部であるラドクリフ・カレッジに囲われている。私がいたバンティング研究所は学位取得後の女性学者に開かれた数少ない独立研究機関の一つで80～81年度は創作を含む28人の異った分野の女性が自由に仕事を進め、本を執筆していた。うち半数は女性学及びその関連領域である。同じ建物の中にはまた、アメリカ女性史資料の宝庫であるシュレジンガー図書館があり、カレッジが開く様々な講演会やセミナーとあいまってラドクリフをニューイングランドにおける女性学ビルグリメッジ(巡礼)のメッカにしている。

ハーヴァードには幸いにも急進的な政治活動で知られるケネディー・スクールがあり、ここで私はニュージーランドからM・ウェアリングを講師に招いた“フェミニズムと制度”という最もラディカルな女性学セミナーに参加できた。

さらにプロフェッショナルな研究を行っている機関に名門女子大学ウェルズレー附属の女性研究センターがある。俗世間から離れた緑の美しい大邸宅を使っているこのセンターは、主として女性の変化する役割にまつわる社会問題の研究のために創設された。が、初期の女性の高等教育と職業の開拓という高踏的な目標は末広がりに地域社会に根をおろして今ではコンピューターを駆使して“家族と社会のネットワークづくり”“職業をもつ母親のいる家庭の学童問題”“父親の家庭参加”などのテーマにとりくみ、同時に最先端の研究成果と情報を印刷してアメリカ中に流している。

私は82年の初夏からひきつづきハーヴァード大学とウェルズレー・カレッジに席を置くことになったが、ここにいると「女性学は存在するか」という問いは遠いものとなり、女性学は現に存在し、前進しているという実感を強くもつのである。



《 第 7 回 研 究 報 告 会 報 告 要 旨 》

フ ラ ン ス 革 命 期 の フ ェ ミ ニ ス ム

—— コ ン ド ル セ の フ ェ ミ ニ ス ム を 中 心 に ——

桑 原 糸 子

周知のようにアンシャン・レジームを打破して近代市民社会を形成したフランス革命思想の主流にはフェミニズムはみられない。象徴的にフランス革命期の人権宣言の自由・平等はフェミニズムを意味しなかった。しかし身分制の不合理を否認してすべての市民の自由と平等の確立を目的とした18世紀フランスの政治的自由思想の中には普遍的に個人の自由と平等を実現する思想が包含されていた。フランス革命政府は政治的自由思想を母胎としながら、フェミニズムを覚醒させようとしなかったが、他方、その政治的自由思想を起源としてフェミニズムを市民の平等思想の中に統合させていた男性の思想家がいなかったわけではない。数学者・アンシクロペディスト・ジロンド派議員のコンドルセ(1743-1794)がその代表的なフェミニストである。

コンドルセは当時の男女不平等の動機が男女の身体的構造の差異、知的能力および道徳的感性の差異を根拠にしていることを厳しく批判した。かれの批判の要点は、人間の能力の優劣を決定するものは性によっているのではなく、まったく個人的な能力に起因しているということにある。したがって、女性は母性機能があるが、それによって女性の能力が普遍的に男性よりも劣位になるとする理由をコンドルセは認めない。また男女の知的能力を比較するにしても、男女平等の教育が実行されていないのに男女の知的能力の優劣を問うても公平ではない、という。だから現在の知力を根拠にして女性の知力が男性より劣ると結論することはできない。他方、女性の道徳的感性についても同様であり、女性の差別された社会的条件を無視して男性よりも劣る、と結論するのは不当である、という。

コンドルセが具体的にフェミニズムを主張したのは、①男女平等の教育権、②男女平等の政治的権利であり、女性の解放にかかわる見解として③女性の労働による自立、④性について優れた思想がある。コンドルセは、教育を社会的平等を確立するために重要な手段であるとみなしていたので、当然男女平等の公教育——普通教育・職業教育・科学教育(高等専門教育)——、男女共学を要請する。そして女子の教育目的の意義を①家庭で子供の教育を監督できる、②夫と妻、兄弟と姉妹、母と息子の中に存した人間的不平等が消滅し、家庭に幸福と平和、徳をもたらす、③男性の知的水準の維持、公教育の利益の保存に役立つ、④公教育権は男子と平等に女子も有するので女性は男性と同じ教育を共有する、と説いている。

さて、コンドルセが男女平等の政治的権利を主張した根本には、人民主権の思想がある。権力は人民に由来するのであり、市民は自ら同意して制定した法律にしか従う義務はない。この関係は、人間として男女共通であるのは当然である。「革命」前にコンドルセが考えていた男女平等の政治的権利は、一定の財産を所有する男女に限定していたので、今日の普通選挙の思想と同一でないが、制限選挙制の枠内で男女平等の条件を要求していたのは注目すべきである。近代国家の選挙権はすべて男性中心の制限選挙から男性だけの普通選挙へと発展してきたことを想起してみれば、コンドルセのフェミニズムは評価できよう。

また、コンドルセが男女平等の政治的権利を主張した思想的根拠は自然権である。自然権は男女間で異なるので、女性に政治的権利を認めないのは自然権の第三の原理である平等に反し、圧制である、とコンドルセは断言する。

現代においても男性に従属した女性の生き方が打破しきれていないのにコンドルセはフランス革命期にすでに、女性は家庭生活だけで一生を終るべきではないと考え、職業生活との両立に意義を認めていた。コンドルセの女性の労働観はすでに20世紀の我々の時代と同一の意義をもっている。かれは、労働することは経済的独立に必要なだけでなく、精神的自立を達成するために有効であることを強調する。そのため、女子には労働生活ができるように職業教育または専門教育・技術を与えておくことが要請されている。性に関しては、コンドルセは好きな女性と結婚し、懇請された離婚に同意しているの、自由恋愛の思想をもっていたと思われる。また、非嫡出子・未婚の母の公的救済について提言している。

最後に、コンドルセはフランス革命期には男女平等が実現するだけの社会的背景がないが、必ず人間の未来の進歩の中に男女平等が実現されなければならないと展望した。コンドルセによれば男女平等が実現するには知識と自由の進歩、道徳の進歩、人間の自然権尊重の進歩と人類の不動の結合がすでに啓蒙せられた人間の全階級におこなわれるようになることが必要である。

《寄稿》

女性学雑感

溝口明代

昨年の夏、サンフランシスコから、ニューヨーク、ワシントンへ、2カ月近く、アメリカ旅行をした。その間、いろいろな地方のいろいろな運動体、女性運動家達との出逢いが、いろいろな事を私に考えさせた。

出逢ったアメリカの女性、それは、運動のグループにかかわっているかいないかにかかわらずごく普通の女性達が“自分はフェミニストだ”“フェミニズムの賛成者だ”と自己規定した。そして、彼女達はこの自覚にもとづいて、日常生活のさまざまな場で、それぞれの方法で、それに匹敵すると自己規定した何かの行動、行為をしていると語った。

私は、アメリカでは“フェミニズム”という言葉のはたす役割が非常に大きい事に気付いた。“フェミニズム”は多種多様な個を連帯させると同時に、女達の選択によって創られる新しい社

会、新しい価値観による未来社会を表わす言葉として共同幻想としてあるように思われた。ある運動者は、

「フェミニズムは、 Kommunismusと同じように、解放された社会へ、社会を動かす思想だ。あらゆる抑圧に対する闘争を含む思想であり、階級、民族、人種による抑圧を否定すると共に、性にもとづく抑圧を否定する。あらゆる世界にレイプがあるかぎり、女性にとっては性の闘争は不可欠だ。男の力、暴力による直接的な支配のみならず、男性の価値観で今の社会は造られており、女は二義的な存在=客体として位置づけられている。これからは女達は主体を取りもどし、新しい価値観による、社会、文化を創造する必要がある。この点で私達は、過去にあった女の運動、ウイメンズ・ムーブメントとは全く異なったものだとわれわれの運動を考えている。」と語った。

“人間”というわく組で示されているあらゆる基準のもとにある普遍的共同幻想が“男”を基準にしており、女性に対しては抑圧構造としての働きしかない以上、それを否定した別の普遍的価値、共同幻想を必要とするのは当然であり、共同幻想なくして、自己幻想は生まれぬし、自己幻想なしに個の確立はない。さまざまな現実の抑圧をはねかえし、闘争主体となるためにも、この問題の検討は不可欠だ。女性学を考える場合にもこれは根本的な問題であると思われる。それは次の言葉に現われる。ある日本人二世の運動家は、

「私達は、人種差別のことだけでなく、女の問題も、階級の問題も、黒人達に教えられた。文化＝価値にもとづく抑圧と差別がどれほど非人間的に、暴力的に収奪をなすものかを知った。“私は何ものか”を語り得る存在でありたい。」と。またある女性は、「“望ましい女の社会”はまだプランニングされていない。だが、我々にとって、明確なことは、今のあらゆる価値と、それを生む構造を組み変える必要があるということだ。政治、経済、文化、社会のすべての分野において、それがなされねばならない」と。

このように、アメリカの運動は、現実の社会、経済、政治における平等の条件、場を獲得するという運動だけでなく、その根本にある“価値を組み変える”運動に重点が置かれているように見受けられた。この、ものごとを規定しているわくそのもの、“価値の基準を創り変える”“何をいかに変えるべきか”というむづかしい問題を成すために、その追求のプロセスとして、学問が必要とされている。それが女性学であるようにみうけられた。したがって、学問をする「人」が生きる事と、「運動」と「学問」は必然的に不可欠なものであり、個々人がそれを選択するウェイトの置き方の違いによる表現の差でしかない。まして、「女性学とはどういうものか、女に興味があるか

ら調べたい」などという物象化された主題の追求とは違いものである。

サンフランシスコの大学における女性学の講師は、運動家のアンゼラ・デービスで、先年は、「階級と人種と女」、今年は、「少数民族と女」というテーマである。また、その女性学概論、「女の歴史」は婦人運動家達の自己史である。一方運動の方を見れば、ヨセミテ公園で開かれたウイメンズ・フェスティバルのワークショップの講師は、ケイト・ミレットであるというように、運動と学問とは、形においても、共有している。それだけでなく、市民とも共有する。ウイメンズ・ブック・センターのオーナーは、農村女性の研究書の著者であるし、私が何げなく町の本屋で『白人男性社会の女』という社会学の本を買おうとレジに出すと、レジスターの女性が、「私の本です」と署名してくれるというように、である。それは、象牙の塔の中の権威的なアカデミックの場にある特別なもの「学問、学会」というイメージとは、質的に異質なもののように入りけられた。

一方、運動の側から見ても、各グループの出しているミニコミや、女の新聞等、各出版物をみれば、その分析、評論の適確さ、質的な高さは、女性学の役割なしには考えられぬ高度なもので、この事を見ただけで、アメリカ社会全体の女性研究が、広く、深く、厚いものであることが感じられた。

現代の学問は、より複雑化し、数量化し、客観化し、専門化して、なま身の人間生活から遊離する。これは、近代社会における疎外の一つだと思われる。知識と行為のみを追い心を軽んずるこのような主題の追求法は、男性原理による過度な抽象化や、無限的発展拡大の人間(男性)至上主義にもとづく偏った価値観の生み出したものと思われる。その結果としてある、個的な「私の主題」の追求という近代的な学問のわく組を超えて、他

と共に、抑圧のない、女の未来社会をいかにすべ 彼の国と日本とは、国状も異なる。当然女性学
きかを追求の主題に置くような、価値くみ変えの にも個別課題は存在する。それ故に一層、女性の
学問として、学問の未来的なあり方を表わすもの 共同幻想へのとり組みと、個別独自な問題へのア
として、女性学は位置すべきであろう。女性学は、プローチと、それらの実生活の場への フィード
単に、女性が主題であるのみならず、その質を問 バックが重視される必要があるのではなからうか。
われるべきであろう。

女性に関連する研究と教育にかんする国際会議について

主催 シモーヌ・ド・ボーヴォワール・インスティテュート（コンコルディア大学）

開催地 モントリオール、カナダ

日時 1982年7月26日～8月4日

会議の目的

- 女性に関連する教育・研究・関係諸問題について討論と交流の国際的フォーラムを提供すること
- 世界各地に新たに生まれた研究センターや女性学グループを強化すること
- 女性関連教育・研究の、社会的・経済的發展にたいする寄与を認識し、高めること
- 女性関連教育・研究活動のネットワークづくりを、国内、世界諸地域、国際レベルで促進すること

使用言語：フランス語、英語、スペイン語

費用：自己負担、または所属団体、政府、国内・国際関係諸機関等からの財政援助によってまかなうこと

食費、宿泊費：1日約23～98カナダドル（1カナダドル＝約205円）

会議テーマ：（別掲）

参加：参加者総数は、全世界で300人に限定される。参加者は世界各地域からバランスを考慮して選ばれる。各地域ごとに、地域連絡委員を窓口として、申し込む。参加者の最終決定は、主催者が行う。参加者総数が限定されているので、申込者全員が出席できるとは限らない。

申込手続：仏、英、西語のいずれかで、つぎの2点を2枚にまとめ、2部を地域連絡委員に送付する。（日本は藤枝霏子）

イ） 会議テーマのうち、とくに関心ある分野

ロ） 研究、教育、研究／社会活動における申込者の現在の活動状況

締切り：1982年2月25日

参加希望者は「モントリオール '82」日本連絡委員藤枝霏子あて申込書類をお送り下さい。

PLENARY I RESEARCH RELATED TO WOMEN - CONCEPTUAL APPROACHES

- Workshops I
- A.
 - 1. What do we mean by research related to women?
 - 2. What are our methods of research?
 - 3. What research tools do we need?
 - 4. How do we deal with controversial issues?
 - 5. How are we preparing for the future?
 - 6. How do we acquire and transmit information?
 - B. Current state of research related to women in:
 - History - Sociology - Psychology
 - Economics - Literature - Linguistics
 - Biology - Political Science - etc. ...
-

PLENARY II TEACHING RELATED TO WOMEN

- Workshops II
- 1. What do we mean by teaching related to women?
 - 2. What are our methods of teaching?
 - 3. What strategies do we use in an institutional environment?
 - 4. What strategies do we use in a non-formal environment?
 - 5. Does our teaching help to bring about social change?
 - 6. Should we, or should we not, establish collaborative training programmes between countries and regions?
 - 7. How can we use the media?
-

PLENARY III RESOURCES AND NETWORKING

- Presentation National and international resource agencies.
- Available and potential resources; definition and application of networking; strategies for improving communication regionally, nationally, and internationally.
- Workshops III Regional Meetings: Follow-up.
-

PLENARY IV RESEARCH AND SOCIAL ACTION

- Workshops IV
- A.
 - 1. How do we define action-oriented research?
 - 2. How do we use our knowledge to affect public policy?
 - 3. How do we use our knowledge to affect other women's lives?
 - 4. Does action-oriented research indeed result in action?
 - 5. Information and dissemination as action tools:
Who controls research findings?
 - 6. What purposes do national and international agencies serve?
 - B. Case Studies & Participant-Initiated Workshops

第 8 回 研究 報告 会 の お 知 ら せ

報告者 江原由美子（東京都立大学助手 社会学）

テーマ 70年代のウーマンリブ運動

日時 3月6日(土) 午後2時～4時30分

場所 東京都立大学A棟第2会議室

東横線都立大前下車 徒歩5分

会費 500円

70年代日本のウーマン・リブ運動の主張を、特に「ぐるうぶ闘う女」のパンフレットその他の資料を中心に考察し、それが生じるに至った社会的背景、運動の動きの簡単なフォロー、運動内部の矛盾、その運動の限界性等について、内在的に追ってみたい。——というのが江原さんの意図のようです。また、報告の後の討論の中では、将来の女性解放運動の方向性等について幅広い視点からの批判、指摘をいただきたいと希望しておられます。

事 務 局 か ら

ください。

◎ 『思想の科学』の1981年7月の「女性学入門」の特集号、残部が少なくなって参りました。

お申し込みは送料誌代とも600円分の切手

(50円か100円切手が望ましい)を添えて事務局へ。

◎ 亀山美知子さんより、昨年9月の第5回研究報告会の席上、出席者の方から山川捨松の資料に関する事でアドバイスをいただいたけれど、その方のお名前と御連絡先がわからないとのこと。お心当りの方は、☎615京都市右京区西院月双町111マンハイム5条309亀山美知子さんの方までお知らせいただけませんか。

◎ ただ今、この6月に予定している第3回総会のプランを検討しております。今年は1つのテーマとじっくり取り組めるシンポジウム形式にしてはどうかと考え、テーマ、出場者等を考慮しておりますが、昨年のように個別の研究発表をしてみたい方がおいでになりましたら、3月6日(土)までに幹事か事務局の方にお申し越し

編 集 後 記

多くは私の個人的事情により、本来なら1月末に発行すべきこのニュース9号の発行が半月も遅れてしまいました。間に合うようにと速達で原稿をお送り下さった方々、会員の皆様方に深くおわびを申しあげます。偶然にもその遅延で、カナダ・コンコルディア大学からの国際女性学会に関する緊急な御案内を載録することが可能になったのですが、割愛しなければならなくなった原稿もいくつかございます。それらは次号廻しとして、ここに第9号をお届けいたします。 (漆田)

発 行 日 本 女 性 学 会

〒103 東京都中央区八重洲1-4-21

共同ビル13F 西洋美術研究会内

電話 03-274-1791
